

二〇二二年度 高等学校

国語

- ※ 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
- ※ 解答時間は五十分です。
- ※ 字数制限のある問題は、句読点も字数に含めること。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 ※出題の都合上、元の文章を一部改めたところがある。

「十で神童^{※1}、十五で才子、二十^{はたち}すぎればただの人」

幼いときには、目から鼻へ抜けるほど賢いと言われたのに、大人になったら、そんなことが夢のようになくなってしまふということが、しばしばある。このことわざは、やんわりとそれを皮肉っているとも考えられる。

十歳くらいのときには、将来のことなど、わかるものではない。神童は必ずしも天才にはならないのだと教えて、目先の判断をいましめる。

人間には予測の能力がある。それはたしかだが、その予想が当たるかどうかは、また別の問題であろう。ほんの五年、十年先のこともわからない。ましてや、人間の一生を占うことなど至難である。

七〇年代にかかるときに、マスコミなどで七〇年代の社会はこうなる、といった予想を記事にした。(a)、多くの人が、一九八〇年までには、人々は街頭で公然とキスするようになっていると予言? したものだ。ところが、一九八〇年になっても、そんなことにはならなかった。これはほんの一例にすぎないが、こんな簡単なことから予測が外れる。

ましてや、Aリガイ関係のある問題についての予想は、多く希望的観測の範囲を出ない。

毎年、就職シーズンになると、人気企業のランキングが発表される。そのときのもっとも人気の高い企業は、その時点の評価である。入社して、すこしえらくなるころには、社会の情勢、会社の状態は大きく変わっているに違いない。いまいいからといって、何年先もいいとはBボショウできないだろう。①目先だけで判断するのは危険である。

人間の場合、なるべく早く花を咲かせた方が有利だと見る人が少くない。「十で神童……」というようなこと

があるにしても、なるべく早く目立つに越したことはない。

小学校へ入るときには、まだ、将来を予測するのは難しい。ただ、学校は点をつけ、順位をつけるところである。みんな同じように有望な可能性を秘めている、などという評価をする教師は怠慢だと叱られる。どうしても目の前のちよつとしたことで、優秀と平凡とを区別しなくてはならない。

早春である。まだたいていの花が咲いていない。いち早く花を開くチューリップはいかにも優秀なように見える。それにいい点を与えるのは間違っていない。チューリップちゃんは神童のように**Cサツカク**される。そのとき、ダリアはまだ花どころの騒ぎではないけれど、もう咲いている花があるのを見て、不安になる。ダリアちゃん自身はのんびりしていても、親があせる。早く咲かなきゃだめじゃないの、と言って、塾へ通わせたりしかねない。

放っておいても、ダリアは夏が来れば、咲く。そうなくても、キクはまだ葉ばかりである。キクちゃんのまわりは、これではもう花は咲かないものとあきらめてしまいかもしれない。花が咲かないなら、抜いて堆肥たいひにでもしようという親があらわれる。

急いではいけないのである。めいめいの花にそれぞれの咲く季節があるように、人間も花をつける時が違っている。やっかいなのは花の季節はあらかじめわかっているのに、人間の開花はいつなのか、咲いてみないとわからない点である。

【中略】

教師は簡単に、将来を見通したようなことばを口にするのである。

「キミのような人間が、〇〇〇になれるわけがない」

「キミの成績では△△△は無理だね」

教師だけではない。親も同じような考えを持っている。自分のこどもはいつ大きな花を咲かせるかわからないの

に、よその花を見て、おくらしている、つまり、頭が悪い、能力が低いときめてしまう。

学校を卒業して二十年、三十年経つと、そろそろ昔がなつかしくなる。どこからか、世話好きがあらわれて、同窓同級会が開かれる。恩師をお招きする。(b)、かつての先生は、多少とも自分の教育に悔いを感じるのである。

すばらしく優秀で、目をかけていたかつての生徒はサラリーマンになっている。それはいいが、人間としておもしろくない。冷たいのである。自分の力でこうなったという顔をしている。恩師に対しても、ひと通りの挨拶はもちろんするが、心がこもっていない。仕事で会ってでもするような、口先だけのお世辞である。

すばらしい人間になってくれるのかと思つたが、と旧師はDゲンメツを覚える。

(c)、言うことをきかなくて、いつも叱しかつてばかりいた、札※2つきの悪童が、見違えるような人物になっているのに目を見張る。こういう成長の仕方をするとは思わないで、ダメな生徒ときめつけていた、かつての自分の教育は誤っていたのか。

率直に、②それを告白する先生もいる。認める認めないは別として、二十年前に現在を予想していたら、教育者として、たいしたものである。たいていは、我誤※3てり、と言ってみても、いまさら取り返しのつかない後悔にうちひしがれる。

教育は一生にかかわる。目先や、三年や五年先のことだけを考えてはいけな。ところが、人間は近視眼的にできていて、遠くのこととはよく見えない。せめて、目先のことしか見えないのだという自覚でもあれば、いくらか救いになるのに、たいていは神のごとき権威を持つて、判決をくだす。

(③)のタイプの人間は、学校では④ひどい目にあう。学校の成績がものを言う職業や仕事は、早咲きの、十で神童と言われた人間によって占められる。社会にとつても個人にとつても、これはEシンコクな問題である。これだけ寿命が伸びてきた現在である。人間の一生に対して学校にいるのは、せいぜい十五、六年くらい。軽々と、しかも見当違いの予測をされては困る。

教師も親も、もっと⑤長い目で、こどもの成長を考えたい。これは最高の想像力によってのみ可能である。

(外山滋比古『空気の教育』より)

※1 神童、才子Ⅱ非凡な才能をもった子ども

※2 札つきⅡ悪い評判が定着していること

※3 我誤てりⅡ「私は間違えた」の古い表現

問一 二重傍線部AⅡEのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (a) (c) に入れるのに最も適切なものを次のアⅡカの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ または ウ そして エ たとえば オ ところが カ つまり

問三 傍線部①「目先だけで判断するのは危険である」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を使って、四十字以内で答えなさい。

問四

波線部④「ひどい目」⑤「長い目」の慣用句で使われている「目」はどのような意味として使われているか。適切なものを次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 視点 イ 視力 ウ 様子 エ 体験 オ 外観 カ 可能性

問五

傍線部②「それ」とあるが、何を指しているか。四十字以内で答えなさい。

問六

（③）にあてはまる四字熟語を漢字で書きなさい。

問七

本文の内容に合致するものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は、一生を占うことは難しいが、五年先くらいなら予測することができる。
イ 二十年先の社会情勢や会社の状態を想定して、就職先を探すとよい。
ウ みんな同じように有望な可能性を秘めていると、小学生には評価すべきである。
エ 教師は、生徒に対して将来を見通すような言葉を口にしないほうがよい。
オ 親や教師は、急がず、もっとねばり強く、子どもたちとかかわるべきである。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 ※出題の都合上、元の文章を一部改めたところがある。

東京で暮らす高校生の美緒は学校に行かなくなって一か月がたつ。美緒の祖父は、岩手県で山崎工藝社を、美緒の叔母とその息子の太一と三人で営んでいる。ある日、ちよつとしたことをきっかけに美緒は両親とけんかをし、家を飛び出す。生まれて初めて父の生まれ故郷を訪れ、父のこと、祖父・祖母（香代）のことなど様々なことを知ることになる。

橋の中央から引き返すと、祖父は中津川に沿った小道に入っていた。黙って、あとに続く。東北電力の建物を越えると、柳の木の下から雑貨屋「ござ九」の瓦屋根と白い土塀が現れた。長く続く土塀に沿って、柳の木が数本植えられている。

最初の柳の下で、祖父が立ち止まった。ポケットから藍色の薄い布を出し、首に巻いている。

「おじいちゃんのそれも『香葉の布』？」

ささやくような声で「そうだ」と祖父が答えた。

「さつき、ショールームで私が言ったことを怒ってる？」

「怒ってはいない。植物染料も化学染料もそれぞれの良さがある。ただ……」

祖父が川に目をやった。午後の日差しを反射して、水面が金色にきらめいている。

「植物染料は色止めをしても色が褪せていく。特に直射日光に弱い。私たちが作るものは上着やコートといった、外で着るものだ。日差しで色が褪せては困る。だから化学染料を用いるんだ」

風が吹いてきた。手が冷えてきたのでポケットに入ると、羊のマスコットに指先が触れた。

羊の毛からつくるホームスパンは育つていく布だ。年を重ねるごとに糸から余分なものが抜け落ち、服にすれば、年々、着心地の良さが増していく。子どもや孫にも譲れるほどの丈夫な布は、たしかに色のもちも大事だ。

「さつきは思いつきでフワツと言った。ごめんなさい」

「誰もが一度は思うことだ。美緒のおばあちゃんもそう思ったから家を出て行ったんだ」

「だからって……出て行かなくても。そんなに、そんなに許せないもの？」

「①見解の違いの差は、なかなか埋められないものだ」

中の橋が近づいてきた。この橋には花が盛り込まれたハンギングバスケットが手すりからいくつも吊り下げられている。

橋に飾られた花に祖父が目を向けた。

「自然が生み出すものには命という力がある。人間がつくるものには命がない。だからこそ職人は、自分がつくるものに命を吹き込むことを夢見る。私にとってはそれは、つくった布が、着る人の身体を彩り、温め、守ること。いつまでも飽きられることなく、人とともに在り続けること」

祖父が首に巻いた藍色の布に触れた。

「しかし、香代は命を吹き込むのではなく、植物の命を布に写し取りたいのだと言った。命なきものに命を吹き込むとする私の気持ち、つまり科学技術とは不遜な技だという。どちらもまったく譲らずに別れ、香代は一人で

A キョウリに帰って工房を持った。納屋なやみたいな古家を借りて」

精神的にずいぶん参っていたらしい、と祖父がつぶやいた。

「でも②私も同じだ。それからしばらくして美緒が生まれた。あのショールを作るのをきっかけに、再び二人で話をしたり、食事をしたりするようになった」

「糸みたいだね」

祖父を見上げると、不思議そうな顔をしている。

「初めて糸を紡いだとき太一さんに教えてもらった。『切れたって、つながる』」

柳の枝が風に揺れている。肩に触れたしなやかな枝を、美緒は左右の手でそつとつかむ。

「右と左の糸をBアクシユ^{※2}させて、よりをかければ必ずつながるって」

柳の枝を胸の前でつないでみせると、祖父が笑った。

「たしかにそう教えてきたな。③私たちの糸によりをかけたのは、美緒の存在だったわけだ」

柳の向こうに、太一と訪れた「喫茶ふかくさ」が現れた。

夏の間は涼やかな緑の葉に包まれていたが、紅葉の季節を迎え、建物のまわりの草木はさまざまな秋の色に変わっている。

肩に落ちてきた黄色い葉を祖父はつまんだ。

「この分だと岩手公園もきれいだろうな。盛岡城の跡に行ったことはあるか？」

「ない、と答えると「それはいけない」と祖父が歩き出した。

「盛岡に来たら一度は行かなくては。特に十代の若者は」

「どうして？ 二十代になったらダメなの？」

行けばわかる、と祖父は笑った。

盛岡城の跡地の公園には建物はないが、豪壮な石垣がたくさん残っていた。

C ハクリヨク ある石の壁を背景に、赤や黄色に色づいた木々がどこまでも続いている。

城の二の丸へ続く坂の上から、美緒は来た道を振り返る。

「こんなに真っ赤な紅葉、初めて見た。黄色いのはよく見るけど」

「東京は銀杏^{いちろう}の木が多いからな。ただ、黄色にしても赤にしても、紅葉は寒い場所のほうがきれいだ。冷たい空

気が色を研ぎすませるんだ」

「じゃあ、北海道とか東北で見るといいんだね」

「すなわち、ここだ」

ゆるやかな坂を右に曲がると、広場があった。色づいた木々の向こうに石碑が建っている。

祖父が石碑の前に立った。

「学校で習っただろう。石川啄木の『不來方のお城の草に寝ころびて』の不來方のお城はここだ。これがその歌碑。

『空に吸われし十五の心』。美緒ぐらいの年の頃に啄木もここに來たわけだ」

「私より年下だね」

「二つや三つの差など、私から見ればたいして変わらないよ」

草に寝転ぶかわりに木の下に行き、空を見上げた。

Dゼンレツな赤い葉が空を埋め尽くしている。④あと数日で枝から落ちる葉が、空に向かって叫んでいるようだ。

その色のなかにいると、植物の命を布に写し取りたいと願った祖母の気持ち^{あこが}がわかる。

その一方で、科学の力でどんな色も作り出せる祖父の技にも^{あこが}憧れる。

Eトナリに並んだ祖父が、木の幹に手を触れた。

「美緒のお祖母ちゃん……香代は独立してから、麻や絹も織るようになったんだ。紅^{べにばな}花、茜^{あかね}、藍、びわ、よもぎ。

薬効のある植物の色を布に染め、肌着から上着、子どもからお年寄りまで、（⑤）と考えていた」

「だから肌触りがいいんだ」

ネックウオーマーに手をやり、布の感触を美緒は確かめる。

きつと、祖母は何度もこうして布に触れ、糸や織りの具合を考えたに違いない。

（伊吹有喜^{ゆき}『雲を紡ぐ^{つむ}』より）

※1 不遜Ⅱ思いあがっている様子

※2 よりをかけるⅡ糸をねじり合わせる事

問一 二重傍線部AとEのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「見解の違い」とあるが、この祖父と祖母の考え方の違いを、「命を」という言葉に続くように、

本文中の言葉を使って、それぞれ五字以内で書きなさい(句読点は含まない)。

・祖父	：	命を布に	(	A	)	こと。
・祖母	：	命を布に	(	B	)	こと。

問三 傍線部②「私も同じだ」とあるが、祖父は何が同じだと言っているのか。次のア～エの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 植物染料と化学染料のそれぞれの良さを生かしていたのは私も香代も同じだ。

イ 精神的にかなり追い詰められていたのは、私も香代も同じだ。

ウ 布を染める手法は香代と全く違うように見えるが、突き詰めれば同じだ。

エ 香代を大切に思う気持ちは、私も美緒と同じだ。

問四 傍線部③「私たちの糸によりをかけた」とあるが、どういうことか。三十字以内で、説明しなさい。

問五 傍線部④「あと数日で枝から落ちる葉が、空に向かって叫んでいるようだ」で使われている表現技法を、漢字三字で書きなさい。

問六 () ⑤ () にあてはまる最も適当な表現を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 佳^よい布で人を飾りたい
- イ 佳い布で人を守りたい
- ウ 佳い布で人を^{あたた}温めたい
- エ 佳い布で人を包みたい